

論文の内容の要旨

氏名：楠 田 真

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題名：戦後イギリス若者文化再考―「スウィング・ロンドン」とその余波―

本論では戦後イギリス若者文化を射程とし、50年代後半の文学現象「怒れる若者たち」を起点に、60年代の若者文化現象「スウィング・ロンドン」を構成した文化領域を領域横断的に考察し、その余波が散見される「スウィング・シックスティーズ」以降の社会文化状況の変容を概観してきた。本論の考察視点は、50年代からの文化的連続性、戦後社会の特徴である消費社会に伴うポストモダニズムによる文化の商品化、そして文化グローバリゼーションに伴うトランスナショナルな文化横断性である。本論はそれらを踏まえた上で、「スウィング・ロンドン」の文化的特質と歴史的位置づけを規定し、同現象の社会文化的意義を見出そうとする試みである。

序章では、イギリス文化の特徴である異種混雑性や文化変容について言及し、それが顕著な60年代の「スウィング・ロンドン」の概論的な説明を行った。先行研究を総括すれば、「スウィング・ロンドン」は文化領域における革新的動向とライフスタイルの多様化をもたらした「文化革命」と称賛する評価がある一方で、消費社会に取り込まれた短命な一過性の「メディア神話」であるという批判もある。戦後イギリスにおいては、資本主義に基づくアメリカ型市場経済の消費社会が到来し、労働者階級の若者は「豊かな社会」を謳歌する文化の消費者及び創造者となり、独自の若者文化を形成していった。その「スウィング・ロンドン」は60年代後半のアメリカの「カウンターカルチャー」と一体化して「スウィング・シックスティーズ」というグローバルな拡張を遂げた。

第1章では、若者文化を考察するにあたって、イギリス文化論の系譜を辿り、文化概念や文化研究の変遷を確認した。伝統的な階級社会イギリスにおいて、19世紀のマシュー・アーノルド以降、文化は「高級文化／低級文化」というエリート主義的二元論として語られてきた。それは産業革命の過程で増加した労働者階級の文化的無秩序を教養によって矯正しようとする保守的な中産階級の支配的イデオロギー戦略であった。やがて20世紀を迎え、アメリカが政治経済的覇権を握ると、アメリカの大衆文化がイギリスに大量流入し始めた。その文化帝国主義的側面に対して、オックスブリッジの保守的な文学研究者たちはイギリスの有機体的社会を擁護するために、それまで帝国主義を正当化するイデオロギー装置として機能してきた英文学を学問的に制度化し、文化的規範とする運動を展開した。その後、T.S.エリオットは二元的文化論を踏襲しつつ、文化概念を個人から社会へと拡張させた。その一方で、人文科学の特権化について、C.P.スノウは人文科学と自然科学という「2つの文化」の乖離に警鐘を鳴らした。戦後、消費社会の到来に伴うポストモダニズムが出現した後、レイモンド・ウィリアムズらが二元的文化論を批判し、大衆文化を再定位していった。そうした文化研究はカルチュラル・スタディーズの起源となり、大衆文化について階級、人種、エスニシティ、ジェンダーなどの要素を視野に入れた領域横断的なアプローチが確立された。とりわけ、カルチュラル・スタディーズは若者文化研究において有効な分析手法となった。

第2章では、50年代後半のイギリス文学界に出現した「怒れる若者たち」について考察した。「怒れる若者たち」は労働者階級及び下層中産階級出身の作家群である。彼らの作品の主人公は、地方都市の労働者階級及び下層中産階級のアンチ・ヒーローに設定されており、戦後においても階級社会と帝国意識を温存するエスタブリッシュメントに対する反体制的な姿勢が貫かれていた。それはイギリス文学史において中心的位置を占めていた中産階級及び上流階級出身の作家による文学的正典の牙城を崩す1つの事件であった。とりわけ、1956年は政治的にも文化的にも重要な年となり、ハンガリー事件とスエズ危機という2つの国際紛争の発生による政治的緊張、「怒れる若者たち」の旗手であるジョン・オズボーンの戯曲『怒りを込めて振り返れ』の上演とロックンロールの隆盛による文化的衝撃は、イギリス全土を大きく揺さぶった。時代の寵児となった「怒れる若者たち」は、その同時代性からメディアによって怒りや反抗が商品化されて商業的成功を収めると次第に沈静化していったが、下層階級の社会文化的進出の体現、戦後世代の若者の社会的意識の表出という点で十分評価に値する。よって、「怒れる若者たち」は「スウィング・ロンドン」の萌芽となった若者文化のターニング・ポイントとして位置づけられ、「スウィング・シックスティーズ」の分水嶺となった社会文化的地殻変動であったと言える。

第3章では、1950年代末期から60年代初頭にかけてイギリス映画界で隆盛した映画運動「ブリティッシン

ユ・ニュー・ウェイヴ」について考察した。戦後イギリス映画界はアメリカのハリウッド映画の市場独占、中産階級の階級保身的なプロパガンダである「戦争映画」が量産される状況にあった。その反動から「怒れる若者たち」の提示した階級的問題意識に呼応した若手映画監督たちが「怒れる若者たち」の原作を彼らと共同製作で映画化した「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ」が起こったのである。「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ」は、前身の「フリー・シネマ」から一貫して労働者階級の表象を詩的リアリズムで描写してきた。それは「怒れる若者たち」から「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ」への文化的波及を示している。とりわけ、トニー・リチャードソンとジョン・オズボーンの蜜月関係は文学、演劇、映画という複数の文化領域を横断する文化的連動性をもたらし、商業的成功を取めた。こうして「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ」は、イギリス文化界全体を活性化させる起爆剤となったのである。

第4章では、ビートルズに代表されるポピュラー音楽現象「ブリティッシュ・インヴェイジョン」について考察した。50年代の英米文化のキーワードは「怒れる若者たち」や「ビート・ジェネレーション」に象徴される若者の反抗であり、それは黒人音楽をルーツとするロックンロールと共振していた。文化グローバリゼーションに伴う英米間のトランスナショナルな文化横断によってアメリカから流入したロックンロールにイギリス伝統音楽の要素を融合させたブリティッシュ・ロックは、グローカリゼーションの産物であると言える。しかし、不良少年からアイドルへの商品化によって初期ビートルズの特徴であった北部イングランド労働者階級の反抗的要素は排除される結果となった。それと引き換えにメインストリームで大衆性を獲得したビートルズは飛躍し、アメリカの独壇場であったポピュラー音楽シーンの勢力図を塗り替えたのである。ビートルズの功績は、中産階級の文化的覇権を脱構築して労働者階級の社会文化的進出を促進させ、音楽的ルーツであるアメリカの黒人音楽を本国アメリカにおいて再評価させ、オリジナル曲による自由で創造的な自己表現というスタイルを確立し、ポピュラー音楽に革新をもたらしたことである。こうして「ブリティッシュ・インヴェイジョン」は、新生イギリスの「ブリティッシュネス」というナショナル・アイデンティティの再構築を実現させたのである。

第5章では、英米の「ポップ・アート」について考察した。60年代の「ポップ・アート」はアメリカ大衆文化の影響下にあった50年代半ばのイギリスに出現した「ブリティッシュ・ポップ・アート」に端を発し、その連続的發展である「アメリカン・ポップ・アート」の開花によって定着した。アンディ・ウォーホルが主導した「ポップ・アート」は、表現主義などモダニズムに対する反動として、大量消費社会の大衆文化をテーマにダダ的な「反芸術」を掲げ、斬新なモチーフと技法で芸術に革新をもたらした。それは既成の芸術観を覆し、芸術と日常生活の距離を縮め、「高級文化／低級文化」という文化的境界線を根底から揺るがせた、いわば破壊的創造であった。「ポップ・アート」が市民権を獲得した理由は、大衆文化を肯定的に表現して美術的価値を付与し、万人がアクセス可能なデモクラティックなアートを提唱した点にあり、それは当時の民主化運動などの社会的動向を反映していた。よって、「ポップ・アート」は「ハイ・アート」を頂点とする芸術界の文化的覇権を脱構築した20世紀で最も重要な美術革命と言える。

第6章では、イギリスの「ストリート・ファッション」における女性ファッションの表象について考察した。戦後のファッション界では、高級注文服オートクチュールが衰退し、安価で大量生産が可能な既成服プレタポルテが主流となっていった。その流れから「ハイ・ファッション」への反動として、モッズやチェルシー・ガールといった「ストリート・ファッション」が登場する。とりわけ、マリー・クワントのミニスカートは「スウィングン・ロンドン」の文化的アイコンとして機能したモデルのツイッギーの影響もあって爆発的に普及した。肌の露出によって身体性をより強調したそのデザインは女性の身体意識をラディカルに変化させたが、それはアメリカで台頭したフェミニズム運動とも連動していた。イギリスでも男女平等や性をめぐる議論が活発になり、性的解放の機運が高揚し、さまざまな法改正によって社会的規制が緩和され、「寛容な社会」が実現した。この性的解放は女性の社会進出とともに性的搾取という側面も内包していたが、他方でユニセックスというジェンダー越境の可能性をも示唆していた。よって、「スウィングン・ロンドン」の女性ファッションは、「ハイ・ファッション」の脱構築によるファッションの大衆化によって女性の社会文化的な生活水準を向上させたデモクラティックなプロセスであったと言える。

第7章では、60年代末の「スウィングン・ロンドン」の結末を確認するとともに、「スウィングン・シックスティーズ」以降の70年代から10年代までを時系列で辿り、各年代の特徴的な社会文化状況を考察した。「スウィングン・ロンドン」は60年代後半の「カウンターカルチャー」に吸収されて一体化する形で「スウィングン・シックスティーズ」へと拡張を遂げたが、「カウンターカルチャー」の終焉とともに自然消滅していった。

70年代に入っても、「カウンターカルチャー」の残響は微かに鳴り続けてはいたが、商業主義的風潮によ

って掻き消されていった。イギリスでは「イギリス病」が蔓延して経済停滞が深刻化していたが、その閉塞感を打破する「パンク」が登場する。「パンク」は過激な反体制的姿勢で、抑圧される労働者階級の心情を代弁して若者に人気を博したが、その反抗が商品化されて消費し尽くされると、パンク・ムーヴメントは終焉を迎えた。

80年代は「サッチャリズム」によって産業構造改革が断行され、疲弊する国家経済の立て直しが図られた。だが、その徹底的な合理化政策は労働者階級や移民など社会的弱者を切り捨てる内容であり、ストライキや暴動が頻発し、社会分裂の危機を迎えていた。また、82年のフォークランド紛争は保守的なナショナリズムを高揚させ、大英帝国の残滓を表出させた。同時代に隆盛した「ヘリテージ映画」は帝國的ノスタルジーの表象に他ならない。

90年代は「サッチャリズム」への反動から、同時代を批判的に回顧する「労働者階級映画」が隆盛し、「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ」の社会派リアリズムを再現した。また、「スウィング・ロンドン」を彷彿とさせる「クール・ブリタニア」現象が起こり、若者文化が台頭した。その中心となった音楽現象「ブリット・ポップ」は文化的に消費し尽くされただけでなく、労働党の政治的プロパガンダにも利用され、短命に終わった。一方で、帝国の解体・縮小が進み、ナショナル・アイデンティティの再編が加速していった。

00年代、国際社会はグローバルな危機に直面した。01年にアメリカ同時多発テロが発生し、アメリカはアフガニスタン紛争に踏み切った。さらに英米は大義名分のないイラク戦争に向かった。その結果として、05年に発生したロンドン同時多発テロは、報復に次ぐ報復の様相を呈していた。それは人種やエスニシティといった差異だけでなく、政治、経済、宗教、文化といったあらゆる社会的要素が複雑に絡み合う多文化主義の限界を示していたと言える。「怒れる若者たち」のハロルド・ピンターは英米の軍事行為を公然と批判し、民主主義的な怒りを表明した。

10年代は、12年にダイヤモンド・ジュビリーとロンドン・オリンピックという2大イベントが開催され、ロンドンは活況していた。だが、前年には経済格差や警察活動に対する不満からイギリス全土で暴動が多発した。その暴徒は階級や人種やエスニシティを越えて形成されており、国民に衝撃を与えた。暴動はアメリカの「ウォール街を占拠せよ」や『怒りを込めて振り返れ』の再演及び再評価との共振性も認められ、経済優先主義に対して経済格差と人種差別の是正という民主化を求める反体制的な動向と言える。

終章では、各章で導き出した結論を要約し、「怒れる若者たち」及び「スウィング・ロンドン」の社会的文化的意義を総括した。「怒れる若者たち」の精神的継承については、21世紀に入ってからでも、エスタブリッシュメントに対する若者の民主的な怒りと抵抗がグローバルかつトランスナショナルなレベルで表出している。テロや暴動はその一端に過ぎないが、社会的平等の実現を求めて社会変革をめざす機運が世界各地で高揚していることは間違いないだろう。その根源となる民主的な怒りと抵抗は、「怒れる若者たち」から「スウィング・ロンドン」を経由して、現在に至るまで決して断絶されることなく、脈々と継承されている。よって、戦後イギリス若者文化の精神は、現在でも連続性と継続性を有しているのである。

「スウィング・ロンドン」の最大の特質は、文化領域における伝統的な価値体系の崩壊や境界線の消滅である。50年代の「怒れる若者たち」の精神的継承である怒りと反抗は、文化的連続性のある60年代の「スウィング・ロンドン」の文化領域においてエスタブリッシュメントに対する反動や抵抗として、反体制的かつ革新的動向が展開されたことに証明されている。支配的文化の覇権や優越性を脱構築するそのデモクラティックな活動は、現実の社会全体を変革するまでには至らなかったが、若者の社会文化的進出を促進した功績は十分評価に値すると言える。

また、「文化の商品化」という点で、「スウィング・ロンドン」と消費社会はいわば共犯関係にあり、ポストモダン文化の反動と抵抗という両義性を内包した特殊な文化現象であったと言える。したがって、「スウィング・ロンドン」を「文化革命」と呼ぶには無理があるかもしれないが、「メディア神話」として片付けることも同様に難しい。ただ一つ確かなことは「若者の、若者による、若者のための文化」が存在したという事実である。「スウィング・ロンドン」は次世代の若者たちにとってリクリエーションやリノベーションが可能な文化的雛型を提示したのである。そして、「スウィング・ロンドン」の神話の永続性や以降の影響力からもその社会文化的意義は明らかであり、「スウィング・ロンドン」の革新的創造性は戦後イギリスの生んだ文化的遺産であると結論づけたい。「スウィング・ロンドン」がイギリスらしい伝統と革新的な前衛を共存させたように、若者文化はグローバルかつトランスナショナルな文化変容を経て、独自のアイデンティティを獲得する新しい自由なスタイルを流動的に生み出し、興亡を繰り返しつつも、次世代の精神に訴えかけるデモクラティックなメディアとして、今後も機能し続けていくことだろう。